用語解説

チュウゴクグリ・・・世界３大クリ（ヨーロッパグリ、チュウゴクグリ、ニホングリ）の一つ。渋皮剥離性が良く、かつ甘みが強い性質を持つことから、「焼栗」としての用途が一般に知られている。

変則主幹形・・・・・樹齢５～６年生時までは主枝をそのままにし、それ以後、主枝を取り除くとともに、樹体内に光りが取り込みやすいように誘導した樹形。

傍士 360 号・・・・・ほうじ 360 号。高知県高知市の傍士（ほうじ）氏が育成した、昭和初めからあるチュウゴクグリの大玉品種。華中系品種と言われている。新見市内（哲西地域）を中心に、現在、「哲西栗」として栽培されている。

一般品種 ・・・・・ 種苗法上、育成権が既に消滅している品種。「岡山１号」、「岡山３号」がこれに該当する。

自家受粉 ・・・・・単一品種による両性花（雄花と雌花）で受粉すること。

自家増殖 ・・・・・種子や接木により、自前で苗を育成すること。

自生（台）木・・・ 元々、実生により生育している、シバグリ台木等を示す。

受粉品種（樹）・・・他家受粉を促し、結実を良くするために混植する品種（樹）のこと（例：「岡山１号」と「岡山３号」）。

樹冠直径・・・・・ 樹冠の大きさ（幅）。

果頂部・・・・・・ 果実（皮）の頂き部分。

河北省・・・・・・・チュウゴクグリの最大産地として知られている。国内で販売されている天津甘栗の大部分はこの産地のものである。

開心自然形・・・・・主枝を取り除き、樹体内に光りが取り込みやすいように誘導した樹形。

カットバック法・・・大きくなりすぎた樹（形）を元に戻すため、一度に小さく誘導する方法。

結果母枝・・・・・・きゅう果（クリ）が結実する枝。基部径は一定の太さが必要。

機械油乳剤 ・・・・一般に「マシン油剤」と言われている。

キセニア（現象）・・受粉（雄花花粉）品種による果実への影響を示す。特に、渋皮剥離性や果実の大きさに影響が及ぶことが知られている。

車枝 ・・・・・・・ 主枝の一点から、放射線状にいくつも亜主枝が発生すること。

局地風 ・・・・・・岡山県奈義町、津山市及び勝央町等では、時期になると、那岐山から季節風が局地的に吹き下ろす。一般に「広戸風」と呼ばれ、「日本三大局地風」とも言われている。

きゅう果 ・・・・・クリが入ったイガのこと。

毛じ（もうじ）・・・クリ鬼皮（外果皮）表面に見られる細かいうぶ毛。

内向枝 ・・・・・・ 樹冠内部で、内側に向いた枝。

中生品種 ・・・・・・一般に、９月下旬～10 月上旬に収穫期を迎える品種を示す。当該品種として、「筑波」、「有磨」、「銀寄」等が挙げられる。

岡山甘栗・・・・・・「岡山１号」、「岡山２号」、「岡山３号」の総称。

温湯（処理）・・・・・50℃に保った湯の中に、30 分間、クリを浸漬する処理。果実内の産卵及びふ化幼虫を殺虫する効果がある。

パラフィン ・・・・ ロウソクの原料。融点はほぼ 48～50℃。

ぽろたん ・・・・・ 渋皮離れが良い、ニホングリ新品種。

利平グリ・・・・・・ ニホングリとチュウゴクグリの雑種。高級栗として有名。

生理的落果・・・・・ 栄養状態や樹勢低下によって起こる「前期落果」と不受精による「後期落果」がある。きゅう果が生育途中で落下する現象。

他家受粉 ・・・・・ 単一品種のみで受粉するのではなく、他品種と受粉（交配）すること。

高畝（造成）・・・・ 元々の地盤に対し、さらに一定の高い畝を設けること。一般に、畝高 60cm 以上を対象とする。

天津甘栗・・・・・・ 中国国内からクリが天津港に集められた後、日本等に輸出されたことから、「天津（甘）栗」と呼ばれるようになった。今日では、「焼栗」の代名詞ともなっている。

哲西栗・・・・・・・ 純粋なチュウゴクグリ。「傍士 360 号」を示す。新見市（旧哲西町）の羽場鶴三氏が、戦前、高知市より「傍士 360 号」の穂木を入手して、同市を中心に栽培化を進め、今日、「哲西栗」ブランドとして生産されている。

共台 ・・・・・・・・ 台木と接ぎ穂が同一品種であるもの。

凍害 ・・・・・・・・ 春先の低温により、樹体内において根から吸い上げた水分が凍結し、内部の細胞組織を壊死させる気象現象。

凍害防止資材・・・・県農業研究所及び同森林研究所が共同で開発した資材。

登録品種・・・・・・種苗法で育成権が存続・維持されている品種。「ぽろたん」や「ぽろすけ」等がこれに該当する。

筑波・・・・・・・・ 国内で最も広く栽培されている大粒のニホングリ中生品種。

早生品種・・・・・・一般に、８月終わり～９月中旬に収穫期を迎える品種をさす。当該品種として、「丹沢」、「伊吹」等が挙げられる。

若はぜ ・・・・・・ クリイガアブラムシによる加害のため、被害きゅう果が成熟前に開く現象。

有効土層・・・・・・植物の根が侵入できる、地表からの限界の深さ。森林土壌では、一般に、A～B 層までの層位をいう。

座・・・・・・・・・ クリの下側部分（薄茶色部分）。

在来品種 ・・・・・ これまで育成された品種。地方にある品種（地方品種）も含めると、100 品種以上に上る。